

車

宮沢賢治

青空文庫

ハーシユは籠かごを頭に載つけて午前中町かどに立つてゐましたがどう云いふわけか一つも仕事がありませんでした。呆あきれて籠をおろして腰をかけ弁当をたべはじめましたら一人の赤あ髯かひげの男がせはしさうにやつて来ました。

「おい、大急ぎだ。兵營の普請に足りなくなつたからテレピン油ゆを工場から買って来て呉くれ。そら、あすこにある車をひいてね、四罐くわんだけ、この名刺を持って行くんだ。」

「どこへ行くのです。」ハーシユは弁当をしまつて立ちあがりながら訊ききました。

「そいつを今云ふよ。いゝか。その橋を渡やなぎつて楊やなぎの並木に出るだらう。十町ばかり行くと白い杭くひが右側に立つてゐる。そこから右に入るんだ。すると蕈きのこの形をした松林があるからね、そいつに入つて行けばいゝんだ。いや、路みちがひとりでそこへ行くよ。林の裏側に工場がある。さあ、早く。」

ハーシユは大きな名刺を受け取りました。赤髯の男はぐいぐいハーシユの手を引っぱつて一台のよぼよぼの車のとこまで連れて行きました。

「さあ、早く。今日中に塗ぬつちまはなけあいけないんだから。」

ハーシユは車を引っぱりました。

間もなくハーシユは楊並木の白い杭の立つてゐる所まで来ました。

「おや、蕈の形の林だなんて。こんな蕈があるもんか。あの男は来たことがないんだな。」
ハーシユはそつちの方へ路をまがりながら貫つて来た大きな名刺を見ました。

「土木建築設計工作等請負 ニジニ・ハラウ、ふん、テレピン油の工場だなんて見るのはじめてだぞ。」

ハーシユは車をひいて青い松林のすぐそばまで来ました。すがすがしい松脂まつやにのにほひがして鳥もツンツン啼なきました。みちはやつと車を通るぐらゐ、おほぼこが二列にみちの中に生え、何べんも日が照つたり蔭かげつたりしてその黄いろのみちの土は明るくなつたり暗くなつたりしました。ふとハーシユは縮れ毛の可愛らしい子供が水色の水兵服を着て空銃を持つてばらの藪やぶのこつち側に立つてしげしげとハーシユの車をひいて来るのを見てゐるのに気が付きました。あんまりこつちを見てゐるのでハーシユはわらひました。

すると子供は少し機嫌きげんの悪い顔をしてゐましたがハーシユがすぐそのそばまで行きまして俄にはかに子供が叫びました。

「僕、車へかせてお呉れ。」

ハーシユはとまりました。

「この車がたがたしますよ。よござんすか。坊ちゃん。」

「がたがたしたって僕ちつともこはくない。」こどもが大威張りで云ひました。

「そんならお乗りなさい。よおつと。そら。しつかりつかまっておいでなさい。鉄砲は前へ置いて。そら、動きまますよ。」ハーシユはうしろを見ながら車をそろそろ引っぱりはじめました。子供は思ったよりも車があたするので唇くちびるをまげてやっぱり少し怖いやうでした。それでも一生けん命つかまってゐました。ハーシユはずんずん車を引っぱりました。みちがだんだんせまくなつて車の輪はたびたび道のふちの草の上を通りました。そのたびに車があたとゆれました。子供は一生けん命車にしがみついてゐました。みちはだんだんせまくなつてまん中だけが凹へこんで来ました。ハーシユは車をとめてこどもをふりかへつて見ました。

「雀すずめとつてお呉れ。」こどもが云ひました。

「今に向ふへついたらとつてあげますよ。それとも坊ちゃんもう下りますか。」ハーシユは松林の向ふの水いろに光る空を見ながら云ひました。

「下りない。」子供がしつかりつかまりながら答へました。ハーシユはまた車を引っぱりました。

ところがそのうちにハーシユはあんまり車がかたがたするやうに思ひましたのでふり返つて見ましたら車の輪は両方下の方で集まつてくさび形になつてゐました。

「みちのまん中が凹んでゐるためだ。それにどこかこはれたな。」ハーシユは思ひながらとまつてしづかにかぢをおろしだまつて車をしらべて見ましたら車輪のくさびが一本ぬけてゐました。

「坊ちゃん、もうおりて下さい。車がこはれたんですよ。あぶないですから。」

「いやだよ。」

「仕方ないな。」ハーシユはつぶやきながらあたりを見まはしました。たしかに構はないで置けば車輪はすっかり抜けてしまふのでした。

「坊ちゃん、では少し待つてゐて下さいね。いま繩なはをさがしますから。」ハーシユはすぐ前の左の方に入つて行くちひさな路を見付けて云ひました。そしてそのみちは向ふの林のかげの一軒の百姓家へ入るらしいのでした。ハーシユはそのみちを急いで行きました。麦のはげがずうつとかかつてその向ふに小さな赤い屋根の家と井戸と柳の木とが明るく日光に照つてゐるのを見ました。

ハーシユはその麦はげの下に一本の繩が落ちてゐるのを見ました。ハーシユは屈かがんで拾

はうとしましたら、いきなりうしろから高い女の声がありました。

「何する、持つて行くな、ひとのもの。」ハーシユはびっくりしてふり返つて見ましたら顔の赤いせいの高い百姓のおかみさんでした。ハーシユはどぎまぎして云ひました。

「車がこはれましてね。あとで何かお礼をしますからどうかゆづつてやって下さい。」

「いけない。ひとが一生けん命な縛なつたものをだまつて持つて行く。町の者みんな斯かうだ。」

ハーシユはしよげて繩をそこに置いて車の方に戻りました。百姓のおかみさんはあとでまだぶつぶつ云つてゐました。

「あの繩な縛なふに一時間かかったんだ。仕方ない。怒るのはもつともだ。」ハーシユは眼めをつぶつてさう思ひました。

「あゝ、くさび何ど処こかに落ちてるな。さがせばいゝんだ。」

ハーシユは車のとこに戻つてそれから又来た方を戻つてくさびをたづねました。

「早くおいでよ。」子供が足を長くして車の上に座りながら云ひました。くさびはすぐおほばこの中に落ちてゐました。

「あ、あつた。何でもない。」ハーシユはくさびを車輪にはめようと思いました。

「まだはめない方がいゝよ。すぐ川があるから。」子供が云ひました。

ハーシユは笑ひながらくさびをはめて油で黒くなつた手を草になすりました。

「さあ行きますよ。」

車がまた動きました。ところが子供の云つたやうにすぐ小さな川があつたのです。二本の松木が橋になつてゐました。

ははあ、この子供がくさびをはめない方がいゝと云つたのは車輪が下で寄さつてこの橋を通れるといふのだな、ハーシユはひとり考へて笑ひました。

水は二寸ぐらゐしかありませんでしたからハーシユは車を引いて川をわたりました。砂利ががりがり云ひ子供はいよいよ一生けん命にしがみ附いてゐました。

そして松林のはづれに小さなテレピン油の工場が見えて来ました。松やにの匂にほひがしいんとして青い煙はあがり日光はさんさんと降つてゐました。その戸口にハーシユは車をとめて叫びました。

「兵營からテレピン油を取りに来ました。」

技師長兼職工が笑つて顔を出しました。

「済みません。いまお届けしようと思つてゐましたが手があきませんでね。」

「いゝえ、私はたゞ頼まれて来たんです。」

「さうですか。すぐあげます。おい、どこへ行ったんだ。」

技師長は子供に云ひました。

「どうも車が遅くてね。」

「それはいかんな。」技師長がわらひました。ハーシユもわらひました、ほんたうに面白かった、こんなに遊びながら仕事になるんなら今日午前中仕事が無くていやな気がしたのうめ合せにはたくさんだとハーシユは思ひました。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十一巻」筑摩書房

1979（昭和54）年11月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年12月20日初版第5刷発行

入力：林 幸雄

校正：土屋隆

2007年4月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

車

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>